

真栄原（宜野湾市）

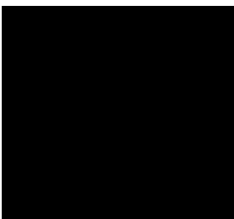
星 雅彦

時 一九六九年十月四日

場所 真栄原 公民館

氏 名 現 住 所

玉 寄 長太郎  
比 嘉 俊 子  
平安座 唯武助  
平安座 トシ  
内 間 英 子  
仲 村 よし子



解説

かつて宇真栄原は嘉数の北東にある隣部落であった。その境界に比屋川があり、真栄原はおおよそ平坦で、その地下には数多くの自然壕がある。

嘉数高地は沖縄戦において二十二日間もつづいた日米の激戦地であった。昼と夜、交互に争奪戦をくり返していたが、真栄原はその一歩手前の米軍の領域にあった。したがって部落にとどまった住民は、自然壕の中から、眼前の戦闘をつぶさに見ながら、ほとんどが早くから捕虜になったのである。

南部へ避難した同部落の住民が生死の戦線をさまよひ、犠牲を出

平安座 唯武助（三十九歳） 防衛隊

当時、馬を持っているものは馬も一緒に、部落の若者から中年までみんな防衛隊にとられた。わしも防衛隊で、白砲隊だったので、その弾運びをした。

港川から米軍が上陸するぞおということだったので、わしらは玉城村の船越や糸数に行つて、白砲や弾を運んで準備をした。一週間したら、そうではなく、北谷あたりから米軍は上陸するということになり、あわてて浦添村の前田に引返した。その頃すでに米軍は嘉数あたりを越えてきよるとのことだったが、わしらの壕はすぐ馬乗りにあった。一週間も馬乗りにあった。それから、森川に後退して、我如古に向かつて発砲したが、十発ぐらい弾を撃ったら、反撃にあい、防衛隊の仲間ほとんど死んだ。片わになって歩けないものは家に帰され、何もかも放つたらかして、兵隊と一緒に防衛隊の生き残りは南部にさがった。二十四名だった。

首里から移動するときは、敵が上陸してから一か月半位経っていた。職名から一日橋を通して、わしらは豊見城に行った。途中で弾にあたって死んだものもいた。その役場の前では、十五、六名になつていった。わしは豊見城で弾の破片で首すじを怪我して、片手が動かなくなつていった。それから渡嘉敷の山の中の壕に入って、永い間、じっとして壕生活をした。

ちょうど豆の季節だったので、夜、畑からハワイ豆をとってきて、それを飯盒で煮て、少しずつ分け合つて食べた。兵隊と防衛隊あわせて十人くらいになつていった。その後、畑に芋や豆をとりに行

したものの、戦前八十二戸あった真栄原の人口の過半数が生き残つたそうである。

一家全滅もなく、そのように多数の人命が助かった大きな理由は、自然壕に恵まれていたということ、一挙に米軍に占領されたことによるが、玉寄長太郎氏談にみられるように次のような目立たぬ原因もあった。それは玉寄氏が支那事変での戦争経験をもち、病身ゆえに防衛隊にとられずに多数の老人女子供をかかえて自然壕にいるとき、まず住民の生命を尊重して、日本軍と区別されることを願つて、いろいろと苦心したのであった。

現在の真栄原は、34号線沿いにほとんど住宅地となつていて北東部は軍用地の金網でせきられている。その軍用地には、普天間マリ航空施設隊が駐屯して滑走路がもうけられている。折しも、われわれが古ぼけた公民館に辿りついたとき、ジェット機の爆音が鳴り響いていた。

また後で雨が降り出し、子供たちが雨宿りにきて、雑音に邪魔されたが、次第にそんなことも忘れて六氏は長時間にわたつて熱心に戦争体験を話して下さった。

平安座唯武助氏は、方言でとつとつと、ぶっきらぼうな口調で話されたが、そんな持味が出しにくく、文章に移し変えるのが多少困難であった。しかしその内容は充実して防衛隊として典型的な苦勞をされた横様である。最後のマブニの海岸の情景など、淡々としているだけに、凄惨を極めている。

佐真下出身の仲村よし子さんにも話して貰ったが、何しろ当時七歳だったそうで、断片的であつたので、割愛させて貰った。

つて、帰つてこなくなるものが出た。ある夜、行つてみると、畑のみぞに落ちて、死んでいるものがいた。七、八人はつきつきと死んだが、また一人二人と、別の負傷者が入ってきた。

手をつた防衛隊の負傷者をつれてきていたが、その人の話はこんな経緯だった。

軽い怪我をしている兵隊を、首里の平良の病院につれて行くといつて、六人の防衛隊が交替でかついで出かけたが、かついでいる防衛隊が重傷をおつたもんだから、かつがれていた兵隊はその場に捨てて、防衛隊だけ引返してきた。しかし傷がひどいというわけでも、また担いで病院に向かったが、豊見城の役場の前で、六人は一べんに砲弾にやられ、かつがれていた者だけが助かって、一人でもた引返してきた。が、その防衛隊は、畑のみぞで水を欲しがりながら後でやつぱり死んだ。別の手をつた防衛隊は、水を欲しがりながら死んで行く防衛隊から、その話を聞いたと言っていた。

わしらの壕にいるものは、みんな怪我をしていたが、後になると夜中に食物を探しに出かけられるものだけが残っていた。それからその十名は東風平（村）の志多伯に移動した。そこでの一週間は何事もなかった。それから具志頭（村）の仲座の壕に移動した。そこには十日間ほどいた。そこにいた兵隊たちが近くの安里（同村）の山からくる米軍に向かつて、白砲を撃つといつて砲弾やらを運んでいたが、その兵隊たち四十名あまりは一べんに死んでいた。火焰放射か何かでやられて、みんな重なるように伏せて死んでいた。

その頃から防衛隊は役に立たないといつて相手にされなかった

が、最初に行った兵隊たちがやられた後、隊長自ら部下をひきいて破名城（同村）に出かけた。だが臼砲を撃つ準備をしている最中に、戦車からの火焰放射でやられたといって、隊長は怪我をして戻ってきた。それから、みんなそれぞれ自分でなんとかしろということ、解散になった。

仲座では、わしの怪我はよくなっていたので、わしはすすんで炊事係りをした。畑から甘藷をさがしてきてザル一杯にして、兵隊たちに配ったが、もうかれらは負傷や疲労でよるこんで食う元気もなかった。何十名もいたが、動けなくなっていて、ただ壕の中にとじこもっていた。防衛隊はわしも入れて三名残っていたから、新垣（旧真壁村）の山に逃げた。そこに二日いて、村におりて、三人は手わけして目ぼしい所へ食糧をさがしに出かけたが、わしはある家の石垣のヒンブンの前で、急に耳がつんぽになった。気がつくとき、砲撃で、一人は胸からたち切られて即死していた。そのザツノウの中には確詰やら甘藷やら食糧が入っていることをわしらは最初から知っていたので、（彼はわしらのだけを食べることをわしらは出さなかつたから……）わしはそのザツノウを引っ張ってみたが、全部こなどなになってしまっていた。取るものがないので、わしは手を合わせて拜んでから、こわくなって一目散にそこから逃げた。

それから二人で新垣から米須（旧摩文仁村）に行つて、そこに三日いてから、マブニの海岸に出た。海岸には十日間ほどいた。そこでは割合に安全だった。わしは米を靴下に一合ほど節約して持っていたし、死人の持っているものを取って食べたりしていた。水はなかったから、そのまま少しづつ食べた。マブニの崖の多い上から海

するみたいだった。銃口をさし向けて、二十メートルぐらい離れたところから数名のアメリカ兵たちはぐるぐる廻つて、次第にわしらに近づいてきた。わしらは自然に手をあげていた。鉄砲を持ってないアメリカ兵が、わしの服をいちいち検査して、ズボンだけにしてい何もかも剣ぎ取った。それから彼は煙草をくれた。

わしらは玉城村のイージュグチにつれて行かれ、番号のついた札を手渡された。そしてすぐにトラックで屋嘉（金武村）まで運ばれた。

屋嘉からは船でハワイにつれて行かれた。

## 玉 寄 長太郎（二十九歳） 一般住民

私は支那事変のとき兵役中に結核患者になった後だったので、その証明書があつて防衛隊にはとられずにすみました。

艦砲がはじまった三月二十三日から、私らは約三千名以上もはいる大きな東伊佐ガマという自然壕にずっと入っていました。

最初そこには、大謝名の人たちや宇地泊の人たちや那覇の人たちや、あっちこちから集まった人たちと、この真栄原の部落民の過半数と合わせて約二千名、それから兵隊（球部隊より石部隊が多く、通信部隊もまじっていた）約千名、馬約百頭が入っていました。

アメリカが北谷から上陸してから、一週間足らずしてアメリカカ兵が壕の中に来ていましたが、それからさらに約一週間してから、私らは捕虜になったわけでした。

岸にかけては、全部焼かれていたが、わしらは岩の多い海岸の岩の下に、穴を掘つて、蟹のように奥深く隠れていた。その入口には、たえず屍体の汁やら蛆虫やらが落ちてきよつた。もう誰もわしらをつかまえにはこなかった。外に出たら、屍体がごろごろしていた。死人はみんな歯をむき出して笑っているみたいだった。あたり一面、金蠅やら蛆虫やらが多くて、人間の糞便もあっちこちにあって気がわるかった。

「ニホンノミナサン、……デテコイ、デテコイ……」と船から放送している頃、わしはときどき崖の上のぼつて、アメリカ兵が捨てた煙草の吸殻を急いで沢山拾った。また住民が捕虜になるために出て行つて残した食糧をかき集めたりした。そこに生き残っているわしらは十名ほどだった。このままだと死ぬほかにはなかつた。毎日、わしらは捕虜になるかならないか、何回も会議した。兵隊たちは出て行つたら間違いなく殺されるというし、兵隊でない人たちは殺されるかもしれないが試しに出た方がいいと言っていた。

とうとう十日間過ぎてから、わしらは砂糖キビにタオルをつけて、ぞろぞろ出て行つた。歩きながらキビをかじるものもいた。マブニの山の上のぼつた。山の上には、無数の電線がはりめぐらされていた。これまでに夜出て行つて戻つてこないものもいたが、その電線にひっかかって死んだことがわかつた。出て行つたものの、そのへんにはアメリカ兵は一人もいなかった。わしらは仲座まで歩いた。もうまた壕の中へ隠れようかという気持ちになっているとき、突然アメリカ兵があらわれた。威嚇射撃をしてから、アメリカ兵たちは集まって近づいてきた。そのときのかれらの様子はまるで悪戯

友軍では、通信隊によって今日ほどこまできている、明日はどこまでくるだろうと、そのニュースがはつきりしていたから、明日は私らの壕までアメリカが進軍してくるということになって、いちどに全部出て行つたわけです。兵隊が出て行くものだから、一般住民の大多数は、こちにいたら死ぬといつて、ほとんど島尻に向かうつもりで逃げたわけです。そうしてそのとき壕に残ったものは、わずかに四、五十名ほどでした。私もその中の一人でした。

私は危険を感じて、三百メートルほど中に入りこんだわけです。奥の方には、広場がありました。そこで一晩中ローソクをつけてすごしたら、ローソクの煙がものすごく多くなつて、眼が痛くてあけられなくなつたので、入口近くの元の所へまた戻つたわけです。すると予想通り、朝つぱらすぐにアメリカ兵が入りこんできたんです。最初、かれらが入りこんできたとき、あれは友軍の兵隊だろうとみんなはいうわけです。側まできてから、アメリカ人だと判つて、みんなびっくりして黙つてしまつたわけです。アメリカ兵は何もせず私らの様子を覗いただけでした。

アメリカ兵は、今日はこちまできて、晩になると再び何百メートルかさがつて行きました。友軍の斬込み隊をこわがっていたわけですね。また朝になったらアメリカ兵はやってきていました。が、晩になったら、友軍が入ってくるんです。四、五日はその繰り返しで、昼と夜、壕の中は米軍と日本軍が交替で出入りしていたわけです。

幾日か経つて一度は、負傷した友軍が十五名ばかり明け方に入りこんでいていました。困つたことには、朝になったら確実にアメリカ

カ兵がくるのに、友軍は入口の所に擬装して歩哨をたてたわけですよ。そこで私は抗議したんです。歩哨して立っていて、もしアメリカ兵がきたら、どうするつもりか、と。こっちは任務だからそのときは撃たにやならんというんです。あんたらが弾一発でも撃つたらこれだけの人たちは全部死なしてしまいが、この歩哨はせんぶ引き揚げてくれんか、と私がいうたら、そうはいかないこっちは隊長の命令だからいうてきません。

そうか隊長は今この壕の中におるのかと訊いたら、はい奥におるよ。アメリカはこっちにくるのか、と訊くから、毎朝七時頃には必ずくるよういたら、それじゃあんたの方で隊長に逢って話してくれよ、ということになったわけですよ。

こっちから弾を撃つたらこれだけの人たちが全部死ぬから歩哨は引き揚げてくれんかと、私は隊長にも話したわけですよ。隊長は中尉でした。あそうか、昨日もアメリカ人がきておったか、と考え込んでいました。こっちから弾を撃たなければ、アメリカ兵はどうもせんから、……それができないようなら、あんたらはこっちからみんな出て行って貰えんですか、と私はいうたわけですよ。すると隊長は、そうかじゃあ歩哨は引き揚げさせるから、あんたの方でできるだけアメリカ人を中に入れないようにしてくれんか、といわれたわけですよ。言葉も通じないことだし、そんなことは私にできないから、あんたらはこわかったらずつと奥の方に隠れておきなさい、と私は友軍を奥の方に隠したわけですよ。

あくる日になって、友軍に出て行ってくれといったら、腹がへってはどうにもならんというので、私は壕にいる人たちから米を一台て、誰も触れようとしなかった。しかしあれたちが吸って捨てたものを、あれたちが帰ってから、私は拾って、吸っていました。

私の親戚に兵隊から逃げてきた青年がいたが、彼はいつも寝て食って何もしないので、私は腹が立っていうたわけですよ。お前は寝てばかりいるけど、自分の食うものぐらいは自分で取ってこい。それで彼は(軍服のままだったが)芋を掘ってくるつもりで私の鎌をかりて出かけたわけですよ。ところが壕から出たら、すぐ弾にあたってしまった。そうして彼は助けられなくて泣いたわけですよ。私はどうしたものかと迷ったが、思い切つてとび出して行き、彼を背負って逃げてきました。するとアメリカ兵が何か叫んで追っかけてきたんです。待てというわけですね。私は待たないで、壕の中まで逃げてきたら、アメリカ兵もそこまで追っかけてきたわけですよ。見たら、赤十字のカバンを持っている。私はすぐ衛生兵だと判つて、背負っていた彼をおろして、足の怪我を見せたわけですよ。アメリカ兵は急いで治療して包帯をまいてくれました。そこで私は、沖繩の人間に対しても治療をしてくれるんだと判つて、それから彼を手真似で誘い、壕内にいる怪我人たちをひとりひとり見て貰いました。その中に一人の男は、腹をやられていたが、アメリカ兵はあけて見てから首をひねってどうもしませんでした。その腹をやられた人は、あくる朝、死んでおった。おそろく見込みがないと診て、治療しなかったんですよ。

私は石部隊に知合いが何人かいたので、夜になると何度か様子を見るかがいにかねは廻ってきました。その中の一人は、もし玉寄せさんがいざという場合はこの手榴弾で死んで下さいと、私に手渡すの

ずつ募集して、クワジュリーシーマー(ませ御飯)をたいておにぎりを作らせて、兵隊たちに配当しました。それから、入口を監視してくれ監視してくれ、と言われて私は、友軍の歩哨に代つてガードに立たされたわけですよ。また、嘉数の部隊に連絡してくれんかと頼まれました。私は連絡どころじゃありませんよ。出て行ったら、すぐ死ぬことは判っているのに……。

だが明け方、四時頃まで監視してから、外はよく照明弾が上げられるから見えるけど、今は大丈夫だからこっちから真つすぐに出て行って貰えんかと頼んだら、どうやらこうやら友軍は出て行つたんです。だから約一昼夜隠れていたことになりました。

その一昼夜の間に、昼はアメリカ兵たちがきておつたです。かれらは私らのいるところまできて、煙草グッスを吸わしてくれました。友軍が出て行つた後も、友軍の一人は重傷だったので、歩けないから寝かしてくれいいうて、奥の方に寝かしてあつたですよ。友軍はみんな腕や肩や頭など怪我しておつたけど、彼一人は腰も動けないくらいやられていたんです。そこで私は彼の武器(小銃や手榴弾)を預つて、敷物の下に隠しておきました。

その彼は壕を私らが出た後、たしかめに行つたら、死んでおつたのですが、多分、焼き殺されたんでしょうな。避難民の残した穢ないものを焼くために、米軍が壕の中をガソリンで燃やしておつたんです。友軍の彼一人と、歩けないで残つた老婆とが、焼け死んでいました。

最初の頃、アメリカ兵が壕に入りこんできてからに、煙草をすすめたけれど、私らはその煙草には毒薬が入っていると思ひこわがりました。そのときの私は、仕方がないときには五十名ほどを手榴弾でやって、自分も死のうと思つて、六個ほど受取つたのです。けれども実際にはそんな気は起らず、捕虜になる場合、手榴弾を全部壕の奥の水溜りの中に、そつと棄てて出たわけでした。

私はいつもボロの着物を着ていて、一番見るらしい服装をしていました。それでも捕虜になる三日前に、アメリカのMPの通訳がきて、私を見るなり、あんたはこの班長だと私に命じるように言いました。

捕虜になるときは、朝七時頃、アメリカ兵に私は呼び出され、命令を受けたのです。この壕の避難民はすぐ出発と。そこで私はおねがひしたわけですよ。腹がへつて歩けそうもないから、飯をたかして食わしてくれんかと。それじゃ何時間かかるかと訊かれて、三時間か四時間の暇をくれ、それまでに食事をすませて準備しておくからと頼んだら、じゃ十時まで、ということになったわけですよ。

ところがみんなにそのことを告げたら、ハバハバして、みんな急いで準備をして、一時間もかからずに飯も食べて弁当も詰めて、アメリカ兵がくるのを待っていました。それで八時すぎには、出発したでしょうな。それから大謝名の闘牛場に、みんなまとめられたわけですよ。

話をもとに戻りますが、壕の中にいた一週間の間に、最初の頃は四、五十名だったのが、他の壕から毎晩避難民が移つてきて、だんだんふえて、四百名ばかりになっていました。友軍は、十五名入つてきて一人残して出て行つたきりで、もうきませんでした。壕から百メートルほど離れたあたりに墓がいくつもあるけれど、それらの

墓に入っていた避難民も、こっちへ移ってきたんですよ。だから食べ物が必要になってきました。

私の馬をつぶそうかと相談していたときに、壕の外に山羊がちょうどいたもんだから、それを取りに行っただけです。夕方六時半頃でした。行ったら、そのへんの墓から避難民が出てきて、訴えていました。昨日は友軍の兵隊がきて、お前たちは邪魔だから一列に並べ、銃殺してやると、言っていたよと話すもんだから、私はそうだったら私らの壕に入ったらいいと誘ったわけです。そのとき百名ばかりきましたね。それで、壕の中で、山羊や豚もつぶしました。また後で私の馬もつぶして、みんなで分けて、油味噌をつくったりしました。

捕虜になって大謝名の闘牛場に集められた四百余名の中から、私も含めてたった四名が呼び出されました。ほとんどが年寄りや女子供でした。その避難民の家族たちは、伊佐浜の砂浜に行っただけです。私ら四名はジープに乗せられて、アメリカのキャンプにつれて行かれたんですよ。そこでは、お前たちはいつ兵隊から逃げてきたか、本当のことを話せ、嘘をついたら死刑にするぞと、二世から何度もおどかされました。私は支那事変のとき兵隊になって病気がかかったことを話し、こんどの沖繩戦には参加してないと二時間ばかり頑張つて、ようやく伊佐浜の家族の所へ戻されたわけです。

そこで砂浜の上で一晩みんなと共に寝たわけですが、私らはみんな不安がついて、私はアメリカ船に乗せられて海にみんなを捨てつもりかなと、それだけしか考えませんでした。

翌日は、北谷(村) ジャーガル(謝苺)の空家につれられて行っ

見なかったですなあ。

### 比嘉 俊 子(三十歳) 県庁教学課職員

私の場合は、父が昭和二十年一月下旬に病死したもんですから、子供たち(三歳と一歳)は小さいし、内地への疎開は無理だと思つて、国頭に親戚がいたからむこうに疎開しようと思っていました。

学年末になって、教学の事務の整理をしている頃、二月末には疎開するようにという連絡がありました。それから間もなく急に、危険だから今は疎開するな、という命令が出ました。そうしているうちに、艦砲がはじまったわけです。

仕方なく私は、身の周りの品物を持って、子供をおんぶして、上の子は手を引いて、母と一緒に国頭までずつと歩いて行ったのでした。夜から出かけて翌朝には漢那(旧金武村)にたどりついて、空襲がはげしいもんだからその山の中に隠れていました。持っているものといったら、一日分の弁当と、米、砂糖、蒲団、着物類でした。夜、再び歩いて、やと宜野座(宇)の避難小屋にたどりつきました。親戚の人たちが避難小屋を作ってくれてあったのです。

二日経ってから、残した仕事のことを気になって、私一人で真菜原に引返しましたが、三月二十六日だったと思います。

学校の書類の整理などして二、三日すると空襲があつて、御真影や書類をもって壕に逃げました。それから何日か壕生活をしていたら、米軍が突然やって来たんです。そして米軍は私たちの壕に向かって、離れたところから出る出るといふ意味のことを叫ぶもんだ

で、そこで八日間放つたらかされ、それから具志川(村)の前原につれて行かれ、あつちには戦争が終るまでおつたわけです。

具志川の前原に、島尻から集められてくる人たちは、ほとんど負傷していました。私らはその人たちを担架でテントに運ぶ仕事をしましたが、そのとき、みんな臭くて臭くて、腕や頭をただタオルでくびつてあるだけで、その間から蛆虫がわいていました。腐りかけた人間のようでした。毎日、かれらを運ぶ仕事をしていました。ときには傷の手当などして看護もしました。

だが夜は、前原から私らは逃げ出して、食糧探しにたびたび出かけました。夜道で、沢山の死人をみました。浦添あたりには、一か所に七、八名から十四、五名の死人がかたまつてころがつていました。私らは馬車馬を借りて、浦添の壕から米俵を一回に十七袋ずつ積んで、三回成功して運んできました。四回目にはCPにつかまつてしまい、米は没収されましたが、三回運んできた米は、みんなにただで配給しました。

まだ五月頃でしたが、毎日捕虜が入ってきていたので、どこそこはどうだったと話を聞いて戦争の状況は知っていました。負けてはいても、まだ一縷の希望はもっていました。

具志川の前原から見える海には、米軍の軍艦やら貨物船やらが海が見えないくらいおしよせていたが、そこへときどき日本の特攻機がとんでくるわけです。アメリカ兵たちは友軍機がきたら隠れるが、私らはバンザイ、バンザイして喜んでいました。特攻機は三機か四機でしたが、一機はすぐ帰って行って、あとは爆撃しながら墜落したようです。しかし六月になってからは、友軍機はまったく

から、みんな驚いてとび出して逃げて行ったわけです。そして、パラパラパラと機関銃でやられて、十名ぐらいはりぢりに逃げたわけです。みんながどうなったか判らないけれど、私はやとそこから夢中で逃げ出して、民家にとび込んで隠れました。

翌日、その空家から出て行くときに、私は弾の破片で左手の先をやられました。指がなくなっていました。怪我した手は、周囲の人たちの世話で、酒で消毒したりして、その後もときどき行きずりの人に手当てをして貰いました。

それから約一か月間、私は民家を渡り歩いて、その台所にある漬物等を食べて、逃げ隠れていました。宜野湾の部落内でしたが、空家の床下や天井裏などに。

ある日、小さい茅葺きの家でしたが、私と那覇出身の見知らぬ小母さんと二人で天井裏に隠れていました。そのうち米軍がきて、「ハマいるか、ナベいるか」とか、怒鳴っているのが聞きました。何やらこわくてじっとしておれない気持ちになってきました。私はもう我慢できず「降りて行こう」と言ったら、その小母さんは「絶対に出て行つてはいけませんよ、行ったら殺されるよ」と言うんですよ。「まさか何もしないものまで殺しはしないでしょう」と言ったら、私の手を引っぱって、私を行かさないようにするんですね。そのうち米軍は何人かその家をこわしはじめたんです。そんな物音を聞いているうち、焼かれるという予感がしました。案の定、煙が出てきて、その家に火をつけたことが判ったんです。私は焼かれたら大変だと思つて、大急ぎでおりて出て行つたんです。ところが小母さんは家が焼き払われても出てきませんでした。

私は病人のようになっていましたが、ジープにのせられ、まっすぐ病院に運ばれました。ユザの胡屋（旧越来村）にある米軍の野戦病院でした。五月の上旬だったと思います。病院で、ちぎれた左手の先の方を手術して貰いました。そうして一か月して退院して、テントの方へ収容されたのです。

収容所の中にいて私はいつも子供たちのことを考えていました。私はたびたび米軍に、子供たちが国頭の方にいるから、つれて行ってくれと、嘆願したんですが、どうしても聞き入れてくれませんでした。「それじゃ私は逃げて行くけどいいか？」ときいたら、逃げ出したらつかまえるというんですね。だけれども私は子供たちのことが心配で、つかまえられてもよいと思って逃げ出しました。

収容所を脱け出して、道路の側に立っていたら、私と同じ考えをもった人たちが四、五名集まってきたんです。離島の小母さんたちでしたが、その人たちも家族の心配をして、国頭に帰りがあっていました。家族は国頭にいるんだが、自分は食糧などを取りに行つて怪我して治療を受けたりして遅くなって、こうして帰りがたくて困って立っているんだというんですね。

そこで一緒にあって、通るトラックに手をあげてみたら、アメリカさんが私たちを乗せてくれたんです。二世がいて、「どこまでか」と訊くので、「国頭まで」と答えたら「国頭まで行くから」と、乗せて貰ったのはよかったです。石川でMPに停められて、降ろされてすぐ金網の中に入れられてしまったんです。

石川の配給所のそばに大きな金網があって、東側が男で、西側が女と区切られていました。ひと晩そこに泊って翌日、神原中学校

昭和十九年十二月でした。私はミシンを持っていたので、首里の平良に家を借りて、兵隊さんの服の修理工として、五名一緒にあって働いておりました。その頃は毎日とても忙しかったです。給料はなく、小遣いとして少しづつはじめのうちだけは貰っていました。

戦争が激しくなると、じきにシャツ等の修理の仕事はなくなつて、白い細長い布を袖の後に縫いつける仕事をしていました。それは信号マークとかいって、後の人が見えるように印しるしになるものでした。夜出かける斬込み隊のもののようにした。私たちもいつ死ななければならぬか判らない状態となつて、手榴弾を手渡されてきました。私たちはいつも救急袋に入れて肌身から離さないようにしていました。

四月中旬頃から斬込み隊ははじまっていて、毎日十名ぐらいつつ出かけ、それは一か月ほどつづいていました。ほとんど初年兵たちが四角い爆薬箱をもって出かけていました。そして斬込み隊は一人か二人、負傷して帰ってきていました。負傷兵が多くなつてからは、私たちはミシンの仕事をやめて、平良の壕からトラゾ山に移りました。医務室と炊事部の移動と一緒にしたわけです。そして私は負傷兵の看護の仕事を手伝うようになりました。そこには看護婦四名、炊事婦五名、看護兵が八名いました。また別の人たちは、毎日五、六名の死人と一緒に穴を掘って埋めていました。

私たちは食糧には余り不自由しませんでした。キャベツの乾燥したのやら、鯉の罐詰やら、カンパンは毎日一袋ずつ配給があり、ときどき甘藷など探してきて食べていました。山の上ののぼつて眺めると、那覇の海の方はずらりといっぱい米軍の船が停っていました。

（現在）の具志先生と違いました。具志先生は、CPになっていたんです。先生はいろいろとそちらの事情を教えてくださいました。何日もかかって一人一人調べるとのことでした。また、一日に甘藷が一個づつ二回しか配給がないからといって、こっそり金網の外から罐詰を二、三個差し入れて下さいました。

それからギスシという二世をつれてきました。私から事情を聞いてくれと頼んだんでしょうね。その二世は、「私も沖縄出身だから、アメリカ国籍ではあつても、郷土人は味方だと思つていられるから、できるだけ便宜をはかって上げよう」と言つてました。それからもし裁判になった場合は、こゝろいいなさいとか、いろいろと教えてくれました。

翌日になったら、調べられる様子もなく、CPのジープがきて、私一人に「早く乗れ、宜野座まで行くから」というんですよ。おそらくあの二世のとりはからいだったでしょうね。それで私はジープに乗つて宜野座まで行きました。やっと母や子供たちに逢うことができましたわけです。あのとき、子供たちは私がだっこしようとしたら、私のことをすっかり忘れていて、最初は逃げまわっていました。二、三日したら、なつくようになりましたけど……。それから私はしばらく休養をとつてから、配給所で働くようになりました。

#### 内間英子（三十四歳） 軍属

小学校六年生の娘は宮崎に疎開させていましたから、私は四年生の娘をつれて、石部隊の磯崎部隊の軍属として首里へ行きました。

た。またトンボといって黒っぽい偵察機がよく飛んでいて、それが現われて去つた後、必ずすぐに弾がとんできました。トンボは一日に二、三回私たちのところへきていました。その頃、兵隊さんの話だと、弁ヶ岳の磯崎部隊の本部では、十五名ほど直撃を受けていっぺんにやられたそうです。眠つてみんな死んだということでした。

私たちは五月の末頃まで首里にいたと思います。磯崎部隊が撤退するときに、二、三十名の重傷者を残していました。私たちと一緒にいた看護兵が、負傷兵はどうせ助からないから最後の注射をしたと言っていました。

夕方、雨が降つているとき、私たちは津嘉山つかさんに撤退し、小波蔵（旧真壁村）の壕（千人壕）に行きました。着いたときは、避難者はあまりいませんでした。あとから警察の人たちがふえてきました。私は足がいたくて歩けなくなつていましたが、警察の知花栄吉とかいう喜数出身の人が私をおぶつてお手洗につれていってくれたりにしていました。その人は、警察署長のお伴をして国頭に行くといつて出て行って、亡くなられたようです。残りの人たちは戻つてきていました。そこには十日間ぐらひ滞在したと思います。そこでも軍関係なので食糧にはそれほど不自由しませんでした。

そしてある日、真栄城さんの奥さんが、あんまり静かだから、「上がつてみてみましようね」といって出て行かれ、それがぎつかけとなつて捕虜になったのです。壕の近くにはすでにアメリカのテントがはつてありました。その人はハワイ帰りのだったので、アメリカ兵と話合つて、みんなを納得させて、私たちも捕虜になる気にな

ったのです。

壕から出て米軍のところへ行ったら、アキサミヨナー（感嘆詞）大変でした。私たちはすぐその場で、アメリカ兵にDDTをふきかけられ、みんな全身真っ白になってしまいました。みんなは首里にいた頃から、風呂も入らず、体はシラミだらけでした。

平安座 ト シ（二十二歳） 主婦

私は自分の家の、昔からの大きな墓が河原端にありましたので、中のカーミ（厨子ガメ）を外に出して片付けて、そこに家族と一緒に避難していました。

艦砲のあったあと、墓から出てみたら、海はずらっと真っ黒くなってアメリカの船がいっぱいなんですよね。も大変だ、アメリカの上陸はまちがいないから、早く山原に行こうといって、うちのおばあ（母）とおじい（父）も、自分の二歳になる子供も一緒に四名で学校近くまで行ったんですよ。

上陸は北谷あたりからという噂があったもんですから、中城まわりで東海岸づたいに行くつもりで、途中まで行ったところ、向うから弾の音が聞こえてくるもんだから、行くのを諦めて戻ってきて、みんなで相談したんです。そうして四家族揃って首里に行きました。

首里の壕はどこも塞がっていましたので、新しい墓をあけて、棺箱だけ出して、表の徳を刈ってその墓の中に敷いて、カーミを片付けて入っていました。そんな新しい墓に二回も入りましたよ。あのへんの人は新しい墓だと判っているんですよね。私たちは隠れ

青々と木が繁っていました。友軍は見えませんでした。路地には、日本の戦車が擬装されて置いてありました。ちょうど反対の真壁あたりからくる人がいて、敵は糸満あたりまでできているらしいと言っていましたから、私たちは行くところがなくて、ヒージャーの新垣に行ってみたら、朝、道の真ん中に爆弾がおちたんです。私たちは四家族二十余名でしたが、不思議とみんな無事でした。その頃からあっちこちに死体が出て、敵の攻撃が激しくなっていました。

新垣から真壁に行ったものの、あんまり偵察機が多くて、危くて、そこから引返して大渡に行きました。

大渡のある家の馬小屋の焼跡の石の囲いの中に、四家族ぎっしり入っていました。六月十八日の晩でした。隣の屋敷に爆弾がおちて、ちょうどそこへ薪を拾いに行った二、三人のうちの親戚の叔母さんが跡かたもなくふぎとばされてしまいました。二十余名のうち、その叔母さんだけが亡くなったわけです。そのときの爆弾の破裂と一緒にとんできた頭ぐらいの石が、私の腹に当たったんです。火を燃やしていた私の右の腹部に石が当たったとき、私は瞬間もう死んだと思ひ込んでいました。だけど人の話しは聞こえるんですよね。落着きをと戻して、這って中へ入って、腹のあたりをさわってみたら、どうもなっていないんです。ただそのときに、私は出血がはじまったわけですよ。妊娠九か月すぎていました。

お産のことも心配でしたが、これからどこへ逃げたらいいのか、私たちはまったく行き詰ってしまったわけです。それからどうせ死ぬのなら自分たちの墓のある部落で死ぬという事になって、また北部へ向かってぞろぞろと歩きはじめたのです。すると、歩いて

る場所がないもんだから、棺箱の入っている墓をあげないわけにはいかなかったのです。棺箱を取り出して、表で擬装して、その近くに三つの石を置いてカマドを作ってご飯をたいっていました。そんなとき見えるんですよね。棺箱は朽かかかかかかかから、ワタジーンという年寄りの絹の着物や、キセル等が入っているんで、首里のどこかのおばあさんだったんです。

私は妊娠六か月でした。どうせ死ぬと思っていたし、たとい子供を産んでもどんな子供ができるか期待もてなかったし、毎日そんな死人を見てばかりいるもんだから、そんな気も起らないんですよ。首里の末吉と金城とに、一週間ずいりましたが、友軍がきて、たちのきをすすめられ、島尻に撤退する気になりました。どこでもいつも友軍がきて、立退命令でした。

私たちは津嘉山から船越にくだって行きました。五月の上旬だったと思います。雨が降っていましたが、おかしなことには、私は救急袋に古い貯金通帳とおしめと赤飯に入れる赤粉だけを入れて、それだけを持って歩いていました。

その赤飯の赤粉は、三か所移動するときまで、使いました。だから何日も赤飯を食べたわけです。おしめは、船越の壕で大雨の水が流れてきて蛆がいっぱい出てきたんですが、そんな水に濡れたおしめを絞って苦心して乾かして、やっぱり救急袋の中に入れて大事に持っていました。

船越には割合長く滞在していましたが、あの頃は、畑で勝手に甘藷を掘ったら、畑の主から棒をもって追い出されていました。

船越から新城あらくすくに出て、マブニに行きましたが、マブニにはまだ

行く方向に、敵の戦車が砂ぼこりをたてて進んでくるのが見えませんでした。おじい先頭になって、それでも私たちは何も考えずただ進んでいました。その途中、一人の小母さんが、小さい子供をおぶって、女の子の手を引いて私たちより先の方を歩いていましたが、戦車を見たもんだからその小母さんは急に手を引いている女の子供を放つたらかして、子供はわあわあ泣かして、自分は反対の方向へ走って逃げて行きましたよ。でも、もう米軍の中に入っていますから、恐らく子供も母親も助かったでしょうけれど。また、日本軍の一人が道端に負傷して立っていました。長い日本刀を持っていたから曹長以上だったでしょうが、私たちに向かって、「避難民しっかりしてくれよ、しっかりしてくれよ」と叫んでいました。顔中血だらけで重傷でしたから、死んだのではないかと思えます。

そのへんは具志頭あたりでした。みんな荷物をかかえていて、ただ歩いて行くと、戦車のアメリカ兵たちは、何も言わず笑顔で私たちを見送っていました。それで私たちはどうもされないと悟って、港川まで行ったんです。

港川には、大きなテントがいくつもあって、黒人兵たちが沢山いました。また不安になりながらも近づいてみたら、びっくりしたところには、その收容所に二、三千人もの避難民を集めてあるんですよ。そこからトラックに分けて乗せて、知念（村）や百名（玉城村の）に運んでいるようでした。

私はまた出血してきたもんだから、おじい二世に頼んで、お産しそうだから近くに置いてくれと言ったら、それが通って、私たちは百名のカチャバルという所にやらされました。私が百名のカチャ

バルでお産をするときは、十二畳ぐらいの床のない家ででした。薪を床に詰めて、みんなが持つている毛布を敷いて、そこへ二十名余りがごろ寝していました。私は大勢の中に寝かされて、次男坊を産みました。産婆の代りをうちのおばあさんと小母さんたちが勤めました。そのとき、持ち歩いていた五、六枚のおしめが役立ったわけでした。が、それだけでは足りないで、米軍におしめを要求したんです。したらアメリカ兵の戦闘用のパンツがきました。洗濯はしてあるが破けているようなもの、ぜんぜん水分とらない固いパンツでした。お産をした日は七月十一日でした。

百名のカチャバルに一か年間いました。おじいや妹は軍に働かずに出て、私は子供を育てていました。ある日、戦後はじめて沖繩の芝居が南洋デブーという役者で催されるというので、私は水を汲んでご飯もたいちやんと準備して待つていようと思つて、子供は小母さんに預けて、水汲みに行つたわけですよ。

その井戸の前には田んぼがあつて、ちゃんとした道は少しまわり道になっていました。そのまわり道の塵のあたりからよくMG部隊のアメリカ黒人が女をさらひに出るといふ噂があつたんです。私がその井戸に水を汲みに行つたら、よその小母さんが水を汲んで戻つてくるころでした。「アメリカはいなかつたですか」と訊いたら、「いなかつたから、大丈夫よ」といふもんだから、行つたんです。岩の影に沖繩のCPが二人腰かけていました。二人は警棒をもつて、大きな米軍の靴をぬいで休みながら監視してましたんでしようね。だけど、そこからは井戸の方は見えなんですよ。私が一斗カンを井戸に突っこんで、もう一つにも水を汲んで、棒を取ろうと

## 嘉数(宜野湾市) 星 雅彦

時 一九七一年一月八日

場所 知花文さん自宅

氏名 現住所

知花 文

知花 フミエ



### 解説

嘉数は沖繩戦において日本軍が決死の抵抗をして、いわゆる嘉数高地を中心に嘉数戦線で米軍の進撃を阻止しようとした激戦地であるが、それゆえに、当地のほとんどの住民は、南部に避難したと思われる。また、当地に居残つた人たちは、壕内に閉じこもつて、幾日も地上の砲声におののいていたらしい。だから戦場の様態を目のあたり見た話を、居残つた生存者から聞き出すことは、けだし無理であつた。

ここに登場する知花文さんと知花フミエさん、この母娘も、もぐら同様に地中の壕の中の生活を余儀なくされ、何週間も蟄居していたのであつた。そしてその体験談の中で注目すべきことは、米軍によつて壕の中に毒ガスを投入されたことである。

そこで、毒ガスを投入される前に、催涙弾も投入されていて、それで苦しんだ経験を知花さんたちはもつていたため、後で即死するよゆうな毒ガスを投入されたときには、急いで蒲団などを被つたので

したとき、すぐ二人のアメリカ兵があらわれて一人が私を後から肩をつかまえて、もう一人は手で合図しながら私の顔を覗きこんで誘うようにすかすんです。私はびっくりして大声で叫んだんです。そうしたら、むこうにいるさきの小母さんが「アメリカカーイー」して叫んだもんだから、CPは靴を持ったままで走つてきたんです。私はアメリカ兵が手離したもんだから、すぐ逃げて井戸場から上がつて、上の方にふるえながら立つて、夢中でCPに文句をいつたんですよ。「どうして監視するなら、井戸の近くでしなないんですか」と、するとアメリカ兵がCPに何か喋つたんです。CPは私に方言で、「アメリカは水飲みにきただけなのに、その女は大声を出すじやないかといゆるんだが」といふんですよ。はたしてCPが英語を知つていたかどうか、その頃、英語を知つていたらCPなんか知らないでもつといふ職についていたと思ひますけどね。そこでCPは「なんでもないから水を持って行きなさい」といふんです。私はもうこわいからいやだと言つたんです。したら、アメリカ兵たちが、一斗カンを私の側に持つてきて、早く行きなさいと手まねするんですよ。

その晩、私は夢でうなされて、「クロンボーどう、クロンボーどう」と叫んで、家族みんなを起してしまいました。現実では、私を襲おうとしたのは白人でしたが、夢の中では黒人になっていました。

あつた。が、それでも半数以上は、寝入つてしまふように死亡したのであつた。

ところで、毒ガスといえば、皮肉にもとき正しく現在、米軍基地の動きによつて、毒ガス移送の問題が連日ジャーナリズムに仰々しく取上げられている。それはいうまでもなく、昨年(七〇年)下半期にB52やメーサーBが沖繩から持ち去られたことにつづいた事件であり、こんどのは、中部地区の美里村の知花にある毒ガス貯蔵施設(レッドハット地区)内からトラックでマスタードガス(百五十トン)を運び出し、輸送船でジョンストン島に移送することになつた、その今日明日の作業への地元の緊張した反響である。

このことは戦記とは直接関係ないが、毒ガスの被災を受けてから二十六年後の今日、毒ガス移送問題が起つたことを照合するとき、いささか神経質にもそれまつわる問題にふれたくなるものだ。私が思うには、どうも演出が叮嚀すぎることから、こいつは米国の政治的な躍動を意味しないだろうか、推察するのである。

沖繩の民主団体の批判的な動きは、むしろ逆手に米政府に取られた計算づくのことではなかつたか。民主団体やジャーナリズムが騒いだのは今日の状況として当然であるが、しかしその反響の中で、在沖米陸軍司令部は、内外の報道関係者を招いて説明会を行なつたり、化学者で構成した監視団をおくりこむ段取り等々いたれりつくせりのものものしい準備から判断すると、どうやら政治的ジョーとしか思えないふしがあるのである。

穿ちすぎるきらいがあるかもしれないが、以前に米国内に移送する計画を出したらその州が極力反対し恐れられてそれは挫折したと